

スパイ
男 之 消 へ へ
に



東京文藝社

風に消えた男

四〇〇円

無検印
承認

昭和四十二年七月一日印刷
昭和四十二年七月五日発行

著者 三好 徹

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

風に消えた男^{スバイ}

目次

第一章	クレオパトラの味	五
第二章	過去の影	三
第三章	ファラオの呪い	三
第四章	アレキサンドリア	一七
第五章	風に消えたスパイ	一七

第一章 クレオパトラの味

1

私はクレオパトラを口にくわえた。部屋のなかに満ちている熱気は、あらゆる行為がすべて徒勞に終わるだろうという感情を私に抱かせ、私の心をもの憂くとざしていた。腕に鉛がくくりつけられているような感じにうたれながら、私は手をのばしてマツチをとりあげ、クレオパトラに火をつけた。

クレオパトラの味は、吸いなれた日本のタバコにくらべると、妙にいがらっぽく思われたが、それは、乾ききった周囲の空気のためであつたかもしれない。汗は次々に体内からにじみ出ているはずなのだが、それはすぐさま蒸発してしまうのである。

暑いからといって、窓をあけはなつわけにはいかなかった。窓をあければ、外界の、燃える沙漠を吹きわたってきた熱気が、爆風のように室内になだれこんできて私をうちのめすに違いなかった。八月のカイロの午後の日盛りを、いくらかでもしのぎやすく過そうとするならば、部屋は閉めきつておくに限るのだ。閉めきつて、部屋のなかの少しでも涼しい空気を、絶対に外へ逃がさないようにする

こと、それが最良の消夏法なのだ。

私はベッドに寝転んだまま、宙によんでいるタバコの煙を眺めた。これからなすべき最初の行動はなんであるのか、それを考えねばいけないと自分に言い聞かせたが、頭のなかの水槽まですっかり乾いてしまっていて、私はなにも考えることができなかった。私にわかっていることは、ここは日本ではないということだけであつたし、それも、頭で考えたのではなく、皮膚で感じとっているのだつた。

じつさい、そのとき、なにか行動を起こしたとしても、観客のいない舞台で踊るような結果になっていただろう。真夏のカイロでは、人々は、一時から五時まで一切の仕事の中絶する。役所も銀行も商店も、すべて戸をおろして休息する。人々は、その間、太陽の前にひれふして、その勢いの弱まるのをひたすらに待つ。

私は少し眠ろうと思った。しかし、疲労と神経の苛立ちとをからだじゅうにつめこんでいた私を、眠りの精は見はなしていた。その上、うるさく飛び回るハエのために、なに一つとしてまとまって物ごとを考えることはできず、最近の私の身の上に起こった出来事とぎれとぎれに想いうかべ、湧き起こってくる疑問になやまされながら、いたずらに、クレオパトラを煙にただけであつた。

やがて、陽がかたむきかけるころ、私はほんのわずかだったが、まどろんだ。そして、顔にまとわりつくハエのためにすぐに目覚め、それからシャワーを浴びた。濡れたからだのまま、私は窓ぎわに歩み寄って、ブラインドを上げた。

この時刻になつて、街はようやく活氣をとりもどしはじめていた。頭に布を巻き、ガラッピヤと呼ばれるだぶだぶの簡單服のようなアラブ民族特有の服を着た男たちが路上をゆきかい、赤く染まつた空には回教寺院独特の尖塔が見える。空氣は、じつに澄んでい、わずか二十四時間前まで眺めていた東京の濁つた空は、ひどく遠い過去のものであるかのような氣がしてならなかった。

私は腕にはめていた時計を見た。五時半になっていた。

時計は、表面のガラスに、少し疵が残っている。その疵は、時計の本当の持主である義兄の清野良一が事故に遭つたとき、つけられたものである。

清野良一は、私の学校の先輩で、同時に、妻である敬子の兄でもあり、商売仇であるオリエンタル物産のエジプト駐在員だつた。かれは、アメリカのある大学に留学し、帰国後、オリエンタル物産に入つた。私が敬子と結婚した直後に、国内営業部から転出し、日本を離れた。ちょうど二年前のことである。その後、かれからは月に一度ほどの割合いで、手紙がきた。どれも簡單なもので、大抵は、エジプトの暑さや見物して歩いた場所の感想が書かれていた。仕事のことに關しては、ほとんどふれてなかつたが、概して順調だつたにちがひなかつた。

ピラミッドやスフィンクスの絵葉書がくると、敬子は、私に向かつて、あなたも外国へ行けるようになるかしら、とよく口にしたものだつた。そのたびに、私は苦い氣持になり、そのうちに、と投げ捨てるように言いかえした。だが、それはほとんど望みのないことを私自身は識つていた。私のつとめている極東貿易は、オリエンタル物産を山とすれば、小さな丘にすぎなかつた。中近東諸国と取

引はあつても、常時駐在員を派遣しておくほどの会社ではなかった。口では強がっていても、心の中では、やはり義兄を羨望していたのかもしれない。私は社長を説いて、中近東、北アフリカ貿易を拡大するために、駐在員を送るべきだとすすめたが、社長の答えは、ハンで捺したように「まだその時期じゃない」というものだった。

しかし、人間の歩む道には、思わざる災厄の陥穽がひそんでいる。それはだれにもはかり知れぬものだ。私がそう悟らされたのはほぼ三カ月前のことだった。

その日、正確に言えば五月十五日、取引先を回って会社へ戻ってきた私は、課長に呼びとめられた。「高宮君」とかれは感情を抑えた声で言った。「オリエンタル物産の人事部長という人から電話があったよ。至急、電話をもらいたいそうだ」

「オリエンタル物産の人事部長？」と私は思わず問いかえした。

オリエンタル物産の人事部長が私にいかなる用件があるのか、まるで見当がつかなかった。オリエンタル物産は、義兄の勤務先ではあつても、私にとっては、いわば商売仇であり、この日も同社の社員と取引先で鉢合わせして、もう少しで極東貿易の契約を奪われるところだったのだ。しかし、課長は、私を猜疑の青白い炎がちろちろと燃える眼で見ていた。私は身の証しを立てる必要を感じ、課長の席に近い電話器を使って、オリエンタル物産へ電話をかけた。

名前を名乗ると、相手はひどく慇懃な口調で、お会いしたいことがあるから、ご面倒でもこちらへ来ていただけないか、と言った。オリエンタル物産の本社は日本橋にあり、私の社は京橋であつたか

ら、行くこと自体、なんら億劫ではなかったが、しかし、私はすぐには承知できなかった。新聞の経済面をひろげて無関心さを装っている課長の存在が、私の意識の幕に影を落していたからであった。

「いったい、どういうご用件なんですか」と私はつっけんどんに言った。「いま、非常に忙しいのです……」

「電話では、どうも申しあげられないのです。ご多忙中、まことに恐縮ですが、お越しいただきたいのです」

言葉は丁寧であつたが、ほとんど命令に近いような厳肅さが、その声にはこもっていた。

「弱りましたね。いま、手がはなせないんですよ。どういう用件なのか、それだけでも言ってくれませんか」

「わかりました。では申しあげましょう」電話の奥で息をのみこむ気配がした。「じつは、清野良一君に関したことで、あなたのお耳に入れなければならぬことがあるのです」

「義兄あにのことです？」

「そうです」

「義兄がどうかしたのですか」

「くわしいことは、お会いした上でお話ししましょう」

受話器を置くと同時に課長が眼を挙げて私を見た。かれを信用させることの困難さを意識しながら、私は電話の内容を話し、一時間ほど外出する許可を求めた。

私の社から、オリエンタル物産に着くまでの間、私の心は何故かさわがしく波立った。外出許可をあたえながらも、私の話を信じていないらしい課長の様子も氣にかかったし、それにもまして、私は本能的な啓示で、清野良一の身の上に異変のすえた臭いをかぎとつていたのであった。

応接室のソファは、クッションがよすぎて私を落ち着かせなかった。私は首筋を硬くして、その時のくるのを待ちうけた。

間もなく、眼鏡をかけた瘦身の男が入ってきた。人事部長の足立です、と自己紹介し、一呼吸してから言った。

「じつは、わが社のカイロ出張所から電報が参りましたね」足立は私から視線をはずしポケットから紙片をとり出した。「清野君がアレキサンドリア市の郊外で、自動車事故のために亡くなったという報せなのです」

私の血管は一時にふくれ上がり、激しい動悸が心臓を揺さぶった。私は言葉にならぬ言葉を呟き、足立の整った顔を凝視した。その次に、私が考えたのは、どうやってこのことを敬子に報せようかということであつた。清野の突然の死に、私はたしかに驚愕していたが、それは驚愕の境界を踏み越えて悲しみへと入って行くことはなかった。私が感じたのは、人生のはかなさというようなものであり、要するに、清野良一と私とは他人でしかなかったのだ。しかし、敬子にとって、この報せは、悲しみ以外のなものでもないだろう。敬子は、兄の死を全身をうちのめす衝撃と悲哀とでうけとめねばならないだろう。足立が実妹である敬子に連絡する前に私に事故を報せたのは適切な処置であつたかも

しれないが、私はつらい役目を背負わされたことになったのだ。私は、落ち着きを回復してから、事故の模様をたずねた。

「それがですな」と足立は苦しげに説明した、「領事館の方から、本社あてに連絡してくれたのですが、あいにくと、カイロの事務所を使っている現地人の男がシナイ半島の方へ仕事で出張してしましてね、くわしいことはまだわかりません。領事館へ電話をかけて問い合わせたのですが、領事館の方も、警察からの知らせで遺体処理に立会うために現地へ行ってくれたそうです。なんでもアレキサンドリアの郊外で、車どうしが接触し、清野君の方は運悪く、岩にぶつかってひとたまりもなかったということです」

「相手の方は？」

「それがどうなっているのか、さっぱりわからんです。シナイ半島へ出張しているハッサンという現地人を呼び戻すよりも、ローマからなら四時間でカイロへ行けるので、いま、ローマ支店へ現地へ急行するように指令を発したところです。本当に、思いがけない出来事で、なんといってお悔み申しあげてよいかわかりませんが……」

足立は、そう言って、ふかぶかと頭を垂れた。弔意の表し方が形式的だからといって、私がかれを責めることはできなかった。オリエンタル物産としては、できるかぎりの措置はとっているのである。そして、オリエンタル物産もまた傷手を蒙っているのだ。私は事後の処置や連絡のことを依頼し、自分の内がわのどこかに欠落したものを感じながら、会社へ戻った。

義兄の遺品がオリエンタル物産から届けられたのは、それから一カ月近くたつてのことであつた。カイロで使用していた日用の身回品や着替えの衣類の底から、血が付着したバスポートも出てきた。血の色はすでに黒く変色しはじめていたが、それを眼にしたとき、私は一人の男が地上から消えうせってしまったことを、刺されるような痛みとともにはっきりと感じとつた。

敬子は、すでに鎮まりかけていた悲しみを再びかきたてられ、声もなく、涙をぼろつとこぼして哭いた。私は優しい言葉をかけてやりたかつたが、そうはしなかつた。言葉が力を持っているのは、感情の波がもつと静まつたときのことだ、と私は考えていた。

遺品を届けにきたオリエンタル物産の社員は、そういう人情の機微を解さぬ男とみえ、遺品をかきまわして腕時計をとり出すと、これが事故のときはめておられた時計だそうです、ガラスに少し疵が残っています、壊れていません、と私の前に置いた。私は一刻もはやくかれが立ち去ることを望み、そして、行動においても、かれを追いたてた。この男なら、もし送られてきていれば、血染めの洋服まで持参しかねない、とも思つた。

敬子が落ち着きをとり戻したのは、数日たつてからであつた。そして、彼女はひとつの事実に気がつき、私に告げた。

「あなた、ちよつと気にかかることがあるのよ。この時計を見てくださいらない」

「時計がどうかしたのか」

私は手にとつて眺めた、ウォルサムの二十一石で、型はやや古いが、耳もとに近づけると軽快な音を立てている。私の眼が見るかぎり、なんら異状はないように思えた。

「べつに、おかしいことはないような気がするな」

「いいえ、故障しているというわけじゃないの」

「じゃ、なにが気がかりなんだ？」

「時計そのもののよ、この時計はウォルサムでしょう？」

「そうだね」

私がうなずいてみせると、彼女はいらいらしたように言った。

「この時計は、どうも兄さんのものじゃないような気がするのよ。兄さんは、どういうわけか、アメリカから帰国後はアメリカ嫌いになつてしまつて、万年筆でもライターでも、決してアメリカ製のものには使わなかつたわ。ドイツのものやスイスのものは買つても、アメリカ製という手、手を触れようとしなかつた」

そういえばそうだった、と私は思いあがつた。かれが日本を発つ前に、餞別として私がアメリカの万年筆を贈ると、かれは、まことに申訳ないが、ドイツものに品がえしてくれないか、と言つた。私はその話を教子に伝えると、彼女はうなずいて、兄さんはアメリカ物は使わないのよ、わたしも理由を訊いたことがあるのだけれど、使いたくないだけさ、というだけで教えてくれないわ、と言つたこ

ともあったのだ。

「この時計は、アメリカ製でしょう？」と敬子は掌の上に載せて言った。「兄さんが使っていたのは、国産品だったわ」

「たしかにそうだった。でも、日本からはめて行つたのが故障したので、向こうで買ったのかもしれない」

「それにしたって、兄さんのことだから、アメリカ物は買わないはずだわ。エジプトではスイス製は売っていないのかしら。そんなことないと思うわ」

敬子の言葉に反駁の余地はなかったが、といって、遺品として送られてきた時計がどのような経路で清野良一の腕にはまっていたのか、推察することもできなかった。オリエンタル物産のものであつても、それを説明できる人間はいないだろう。そして、時計は、私が急にエジプトへ派遣されることに決まり、オリエンタル物産の足立に会うまで、私の机の引出しに収いこまれたままとなった。

勤め先の極東貿易社長古川義介に呼ばれて社長室へ入つたのは、七月末の、東京の街全体が暑さでわき立っているような日の午後であつた。数日前から、北アフリカ向けの綿布の輸出交渉に、私は走り回っていたのだが、取引ははかばかしく進まなかった。まともれば二百万円の利益が約束されているだけに、私は蜜蜂のように飛び回っていたのだが、現地にわが社の出張所のないことがハンデキヤップとなつて、私の努力は徒勞に終わりそうになっていた。